

った。このため上杉家への入嗣は実現しなかったが、上杉氏から贈られた竹に雀の紋章がその後伊達家の家紋の一つとなった。やがて晴宗との和解後、伊具丸森に隠居し、永禄8年〔1568〕78才で歿した。丸森松音寺山に葬る。智松院殿直山円入大居士と追諡する。伊達家歴代で最も偉大だった9世政宗と17世政宗との間にあって、両者に次ぐ足跡を伊達家の歴史に残した人物で、伊達家中興の祖ともいわれる。

資料 伊達家塵芥集の研究（小林 宏）

塵芥集（「仙台文庫叢書」第2集）

“（「仙台叢書」続刊1の内）

“（「伊達家史叢談」2）

“（「大日本古文書」の内）

“（「中世法制史料集」第3巻（佐藤進一、池内義賢、百瀬今朝雄編）の内。「蔵方之掟」をも収録）

## 36. 高力左近は切支丹大名 だったのか

問 「仙台北城下絵図の研究」に次のように書かれた箇所があります。

『寛文8年に切支丹大名である高力左近が仙台藩に預けられた。藩では中島丁の現在の女子師範<sup>(1)</sup>〔現第一女子高の校地〕の所<sup>(2)</sup>にあった屋敷を4軒つぶしてここに居らしめた。この屋敷は二高〔旧制〕所蔵の寛文7・8年「仙台北城下絵図」に初めて見えてゐる。』

この高力左近（こうりきさこん）を切支丹大名と書いてある点が疑問です。他の資料のあらゆるものを見てもわかりません。高力左近は果して切支丹大名だったのでしょうか。また何処の大名だったのでしょうか。

答 問題の記事は「東藩史稿」「伊達家文書」〔？〕による旨の注があるので、典拠となったそれらの資料に一応当たります。「東藩史稿」巻之5（作並清亮）に『寛文八年〔1668〕戊申〔つちのえさる〕二月二十七日、幕命アリ、高力左近将監隆長〔こうりきさこんしょうげんたかなが〕罪アリテ我ニ幽ス』。「肯山公治家記録」前編巻之5、寛文8年2月27日条に『廿七日丙申〔ひのえさる〕評定所へ御家臣指出サル処……高力左近殿領知ノ仕置非分ノ役ヲ懸ケ土民困窮ノ趣、台聴ニ達シ、領知ヲ上収ノ事覚書ヲ以テ演説……左近殿仙台居処御城下片端土屋敷ニ指置ルヘシ……此日午刻御家臣評定所ヨリ左近殿ヲ請取、浅布〔麻布〕屋敷ノ中小十郎景長藩邸ニ移シ、守護ス。或記ニ左

近殿仙台へ指下サレ……』と記されているだけです。他の諸書の記事もこれ以上を出ていません。このような郷土資料による検索からはみ出た問題については、いち早く情報探知の触角を一般的な歴史資料に転ずることです。

徳川幕府の政治実録の最大のものに「徳川実紀」という資料があります。その中の「厳有院殿〔4代家綱〕御実紀」第36の寛文8年2月の条に「高力隆長除封配流」<sup>(3)</sup>のことを次の通り記しています。『廿七日肥前国島原城主高力左近大夫隆長所領三万七千石没入ありて、松平亀千代〔伊達綱村〕にあづけられ、嫡子伊予守常長は酒井左衛門尉忠義にあづけられ、二男右衛門季長は真田右衛門幸道にあづけられ、居邸は牧野飛驒守忠成に預けられぬ。この隆長はもとの摂津守忠房の子となり。忠房初め遠江国浜松の城主たりしが、寛永15年〔1638〕肥前国島原の賊徒たいらぎて後、かしこを鎮撫するもの、忠房其任にあたりりとて、今の城給はり、良民を各所よりよびあつめ、いかにもして人心帰服せんはからひせよとて<sup>(4)</sup>、米金若干下されて、其地を保護せしめられたり。しかるに隆長そのはじめ父が岩槻の城にありしころ、慶長十七年〔1612〕神祖〔家康〕を拝し、元和三年〔1617〕台徳院殿〔2代將軍秀忠〕にも、日光参詣の折から、その城に立よらせ給ひしかば拝し奉る。九年御上洛の時叙爵して左近大夫と称し、明暦二年〔1656〕二月八日家つきしより奢侈〔しゃし〕につのり、領地の政事あしく、非理の課役をかけ、四民くるしむのみならず、家士等虐使に堪ず、さきに鎮西の国々巡視の御使つかはされし時、領民共隆長が虐政にくるしむよし訴ふる者少からず、よってかく罪を蒙りて後、延宝四年〔1676〕十二月廿五日配所にて死しぬ。齡七十二。<sup>(5)</sup>

廿八日月次〔つきなみ〕なり〔中略〕諸大名の輩御前近く召て、こたび高力左近大夫隆長、領民をくるしむるつみ、もつともかろからず。よて国除かる。隆長が外にも猶政蹟よろしからぬ聞えなきにあらず。各前弊を改め、維新の政を行ふべきむね面命あり』<sup>(6)</sup>

以上によって、高力左近は島原城主だったが、悪政の罪によって処罰され、仙台に幽閉された者であることがわかります。また、時代的にも切支丹大名の存在など許されなくなっているし、キリシタン反乱後の島原に封ぜられた高力家の任務からしても、左近は切支丹大名ではありません。「仙台城下絵図の研究」に、高力左近を切支丹大名と書かれたのは、その1世代以前の切支丹大名高山右近と氏名が類似していることから、恐らく両者を混同した著者の一失であると思われます。

注(1) 阿刀田令造著。斎藤報恩会博物館図書部研究報告第4、昭和11年8月発行、昭和51年復刻版発行。

注(2) 切支丹は始め吉利支丹と書き、禁教後は鬼理支丹などとし、第4代徳川將軍綱吉以後は吉の字を避けて切支丹と記した。天文19年〔1550〕イエズス会士フランシスコ・ザビエルらがわが国に伝えた天主教をいう。切支丹大名とは、戦国時代から江戸初期にかけて、このキリシト教を信仰した大名で、高山右近〔摂津〕・蒲生氏郷〔当時伊勢〕・津軽信教〔津軽〕・織田有楽斎長益〔大和〕・大友義鎮〔豊後〕・黒田孝高〔豊前〕・黒田長政〔筑前〕・寺沢広高〔肥前〕・大村純忠〔肥前〕・有馬晴信〔肥前〕・小西行長〔肥後〕・宗義智

〔対馬〕等が著名である。

注(3) 徳川幕府が、はじめ大学頭林銜〔述斎〕を総裁として成島司直〔もとなお〕らに撰述させたもので、家康から10代家治に至る間の編年体実録。文化6年〔1809〕起稿、嘉永2年〔1849〕完成。全516巻。なお、幕末に本書に次いで家斉から慶喜に至る間の実録を編纂した「続徳川実紀」がある。正・統とも活字化されて「国史大系」（黒板勝美編）に収めてある。実録とは、編年体史籍の一種で君主の一代の事跡を年代順に記したものをいう。

注(4) 島原の乱。寛永14年〔1637〕天草及び島原の天主教徒の起した内乱。益田（天草）四郎時貞を首領とし、3万7千の信者が島原城に抛り幕府の討伐軍に抗戦した。幕軍は大いに苦戦し将板倉重昌は戦死。その後老中松平信綱が九州諸大名を指揮して翌15年島原城を落した。

注(5) 島原は天草とともに雲仙の火山灰地で不毛に近く、ここを統治する大名も領民も、ともに苦しかった地方で「難治の地」と称せられた。高力忠房は、特に島原の乱による物心壊滅の跡を治めるに堪え得る者として譜代大名中から選抜されたのである。寛永15年4月13日任命、11月6日領地に入った。

注(6) 仙台に蟄居中は麩米千俵を扶助されていた。高力左近の死去について「肯山公治家記録」後編巻之4の延宝5年正月3日の条に次の記事がある。『〇配流高力左近殿臘月廿五日病死、即チ柴田中務朝成注進ス、臘年廿九日晚到着〔江戸、綱村参観中〕歳暮年始ニ因テ聞達セス今朝言上ス、大条監物ヲ以テ正則朝臣〔相模小田原藩主稲葉正則、綱村夫人仙姫の実父、幕命による綱村の政治指南〕へ達セラレ島田出雲守殿ヲ以テ老中へ披露セラル』。なお、高力家は延宝8年〔1680〕赦免され3千石の旗本として家名再興した。

注(7) 毎月定例の大名の江戸城登城日。毎月1・15・28日を「月次御礼」の日と定められていた。

資料 蔵有院殿御実紀巻36

寛政重修諸家譜巻511

島原半島史中巻（林 銚吉編）

廃絶録中巻

藩翰譜巻11（新井白石）

## 37. 大泉茂基の略歴

問 大泉茂基の略歴をお知らせください。M図書館にたずねても回答を得られませんでした。